日本におけるキリスト教の歩み

その 2　禁教令から迫害初期- 1

安土桃山時代 1568～1600

戦国時代 1493～1615

コエリョ副管区長→

日本最初の司教セバスチャン・モラレス

天正少年使節渡欧中、国内は大事件が勃発。明智光秀により織田信長が、本能寺で討たれる。その後、安土セミナリヨは破壊。オルガンチノ神父と生徒は高槻の高山右近保護のもとで勉学を継続。信長時代、高槻の領主であった高山右近は、多くの大名たちを回心に導いた。また宣教師たちを命懸けで守った。九州内でも騒動が絶えない中、副管区長コエリョの不賢明な言動(武装艦隊派遣依頼)は秀吉に不信感を与えていた。1585 年グレゴリオ 13 世は、日本宣教をイエズス会に任せ、他の修道会が日本への入国禁止。理由は日本布教計画に混乱を起こさせない為。この時から修道会間で不和が発生。大勢の大名が受洗する中、日本の教会にとって大切な恩人大名・大村純忠、大友宗麟が相次いで召された。彼らの死により最後の知恵袋を失くした秀吉は、コエリョに対し不可解な点の説明を求め、また高山右近には棄教を命じた。コエリョの弁解は徒労と帰し、高山右近は全て剥奪され素浪人となる。

伴天連追放令
1587 年 7 月 24 日

1587 年 7 月 24 日ついに秀吉は、“伴天連追放令”(宣教師の国外追放＆布教禁止)を発布。

追放令の要因；九州の戦さでキリシタン大名の数、信者の数を見て結束力の脅威を感じ、放置する事に危惧した。その後ろ盾の宣教師たちの存在にも脅威があった。但し、南蛮貿易は継続。「覚書 11 条」キリスト信仰は“個人の心”次第であり、キリスト教それ自体は禁じない。この禁教令は、明治憲法の発布迄 291 年間効力持続、幾多の迫害の要因となる。

禁教令後、宣教師とセミナリヨの生徒たちは、平戸の生月と度島に移動。大阪、京都、堺の教会は壊滅。高山右近、オルガンチノ神父は小豆島に潜伏。キリシタン大名たちは、秀吉の意向に従った。秀吉は、己の権威を自覚するとそれ以上の迫害を抑えた。しかし、すでに 18 万以上いた信者を見捨てられない宣教師たちは皆、迫害の日本に残り、信者を励まし再度教会建設への希望を託した。幸いポルトガル人の執り成しで、長崎の教会一つだけ残る。九州内では、宣教師の半数以上と主な教会施設だけ有馬晴信の領内に移った。(セミナリヨ八良尾、修練院有家、コレジオ天草の河内浦)その頃、高山右近、小西行長等も小豆島から九州へ移った。その折、織田信長を討った明智光秀の娘、細川忠興夫人たま子は大坂玉造の屋敷で受洗した。後の細川ガラシヤである。大村では禁教令前同様、自由に信仰生活をおくれたが、平戸では信者への弾圧を厳格化。1588 年 2 月日本はマカオ管区から分離し司教区を成立。日本で最初の司教イエズス会のセバスチャン・モラレス神父が派遣され、希望の光と期待。1590 年副管区長を務めたコエリョは 1590 年 5 月加津佐で帰天。二ヶ月後、インド管区長ヴァリニャーノ神父は、インドの総督使節として天正少年使節団を伴いマカオよりしめやかに長崎へ帰港した。

使節団は八良尾で休息、その後、京に赴くまで小西の領地・室津に留まる。1591 年 3 月使節団一行は、秀吉の京都聚楽弟で謁見。親しく一行と談話、楽器演奏も興した。秀吉の姿勢から迫害の終息を期待したが、禁教令を取消すことはなくヴァリニャーノの総督使節であることを疑った。